

私の関係工業会の機関紙に十年間執筆した、海外経験を記した随想集が製本された。高校の美術部の親友M君に一冊送る。彼は昨今抽象画風の油彩をよくし、最近ようやく落ち着いたと、写実一辺倒の私に話していた。

早速電話が来て、「おい、まいったなあ。どうして阪急宝塚線なんだ」。私の本を偶然開いたページの文章が目飛び込み、感極まつての電話であった。M君はもう、「うるうる」状態である。エッセイは、バンクーバー港の夜景を見下ろすレストランでのユダヤ人顧客との会食時、私が神戸港の夜景に触れ、その人には幼少時、日本の通過ビザに救われ、一時神戸に滞在してカナダに逃れた凄絶な体験を吐露する話に展開する。物語の部品として阪急宝塚線が登場する。

M君は十年以上に奥さんに先立たれ、息子さんはカトリック教会の神父になったが、気の毒にも、二年前に他界したと言う。いま改めて聞くと、息子さんは阪急沿線の売布の修道院の院長であった由で、その修道院の墓地に母親と共に眠っていると云う。そうであったか、彼が「阪急宝塚線」と聞いただけで涙ぐんだ訳が氷解した。

M君曰く、コロナの鎮静がみられた春先、周りから会合の誘いで大変だ。「再開できるか実験後、連絡するから是非会おう」そう言えば、彼の浦和の家に上がり込んだ事があつた。

それから二週間程が過ぎた頃、「おい、まいったなあ！」もう一人の親しい同級生からの衝撃の電話がM君の訃報を伝えた。絶句。町内会の仕事中に急性くも膜下出血に倒れ、そのまま亡くなったという。電話で話した娘さんの心強い会話のトーンにむしろ慰められた。

高校同窓句集に書かれたM君のエッセイを読み直してみる。新宿の甲州街道と十二社の角に、彼の勤めた損保会社があり、「春の小川」の由来を求めて参宮橋辺まで歩いた思い出話が詩的な名文で、克明に記されていた。彼には十年間の大坂勤務があつた。いま、売布に戻り安らかな日々が過ぎているに違いない。